

吉本隆明「転向論」

——断層への固執——

平野 明香里

はじめに

柄谷行人が「死語をめぐって」という論考において、死語——すなわちためらいや留保なしには使えないようなある種の言葉として、批判的に紹介している「知識人」なる存在は、柄谷の目に映った吉本隆明その人に外ならない。柄谷によると「知識人とは大衆ではないという自己意識」であり、言い換えれば「知識人（知）は大衆（自然）の自己疎外態」である。しかし知識人は大衆の裏返しとしてのみ存在しうるので、彼らは必然的に大衆の獲得を必要としている。「知識人の批判こそが知識人の特徴なのだ」^{★1}、柄谷がこう語る時、転向したインテリゲンチヤを批判している吉本は、まさに「知識人」でなくて何であるうか。大衆から遊離することで生まれた知識人が、大衆に近づこうとするのは一見、自己矛盾としか思われな

い。柄谷にとって、「大衆からの孤立感」のために転向したインテリを批判する吉本は、それを否定することで自らが知識人たりえたはずの「大衆」という存在を、むなしく追い求める痛ましい一知識人として映っているのではなからうか。

本論で検討したいのは、まさに吉本隆明の自己意識と「大衆」との関係性についてである。大衆の自己疎外態としての知識人という柄谷の定義が吉本にどこまで、どのような意味で吉本にあてはまるか。「転向論」と「死語をめぐって」を比較する限りにおいては、あるが、吉本にあって柄谷にないのは、敗戦がもたらした影響という観点だろう。「転向論」が発表された一九五八年は、吉本が彼自身の「奇妙なノイローゼ」を克服し、敗戦が彼の生涯に与えた意味を開示してゆく時期にあつた。すなわち吉本が、自分は社会においてどのような立ち位置を占めてきたか、また現在占めているか、敗戦は日本社会に何をもたらし何を奪ったのか、「転向論」と、

[Article]
Akari Hirano
Yoshimoto Takaaki's "Tenkō Ron":
Persistence to the dislocation
(Received 1 May 2020)

A Noon of Liberal Arts, No. 10, 2020

その同時代の著作に如実に表れているのである。

第一章 「転向論」の概要

吉本隆明「転向論」の概要を確認しておこう。同論考は、一九五八年二月一日発行の『現代批評』創刊号(書肆ユリイカ発行)に発表され、『芸術的抵抗と挫折』に収録された。^{★2}「転向論」は、「マチュウ書試論」や「固有時との対話」などと並ぶ、一九五〇年代における吉本の代表的作品の一つである。

吉本は、近代日本のインテリゲンチヤが、いかにして彼等の把握した社会に向き合ったのか、その向き合い方を類型化する。その中で、「転向」とは「日本の近代社会の構造を、総体のヴィジョンとしてつかまえそなたのために、インテリゲンチヤの間におこった思考変換」だと、分析に先立ってあらかじめ規定する。

この思考変換はいくつかの類型に分類することができるのだが、その第一のパターンが、佐野学、鍋島貞親らの転向のパターンである。すなわち、「日本封建制の優性因子にたいする無条件の屈服」である。西欧の政治思想や知識に飛びついた上昇型インテリゲンチヤが、弾圧によって封建制から追いつめられ孤立した時に、「悔りつくし、離脱したとしんじた日本的な小情況から、ふたたび足をすくわれた」という事態である。彼等はたんに足をすくわれただけではなく、それまで侮っていた日本の小情況を「それなりに自足したものの」とみなすようになってしまう。こうした形での思考変換が

なぜ起こるかという点、日本独特の歴史的背景——すなわち、「封建制の異常に強大な諸要素」と「独占資本主義のいちじるしく進んだ発展」との結合という、日本以外のいかなる国でも起こりえなかった一事情による。「三二テーゼは、多分に、この結合をたんなる結合と理解した傾向があり、また反対に絶対主義権力は、この結合の両面を、巧みに使いわけた」^{★3}。日本における「芸術的抵抗」は、こうした困難な条件をはじめから背負っていた。それゆえ、革命運動の「前衛」の中におこった政治意識と生活意識の矛盾も、特殊な様相を孕むはずであった。しかし、現実的動向、大衆的動向を度外視することによって、そうした矛盾をそもそも持ち込まないという方法もあった。その方法をとったのが、次の「思考変換」のパターンに属する人々である。

小林多喜二、宮本顕治らに代表される「日本的モデルニスムス」型の「転回」(ないし「非転向の転向」)の特徴は、「思考自体が、けっして、社会の現実構造と対応させられずに、論理自体のオートマチスムスによって自己完結すること」である。「日本的モデルニスムス」型においては、当時マルクス主義の名を借りて流通していたイデオロギー(けっしてマルクス主義そのものではないと、吉本は断じている)のサイクルから逸脱しているか、していないかだけが問題となる。しかしここでは現実的動向や大衆的動向は一顧だにされない。このような現実との接触を欠いたいわば教条主義的、形式的な「非転向」の論者を、吉本は佐野らの転向と同じ原因をもつ現象として捉えている。すなわち、優性遺伝的因子にたいするシンパシーであ

れ無関心であれ、吉本にとってそれらは「日本の近代社会の構造を、総体のグイジョンとしてつかまえそなつた」ことの結果にほかならないのである。

上の二つの思考変換とは異なり、吉本が唯一積極的な評価を与えているのが、中野重治「村の家」に描き出された「転向」である。この作品には、主人公・勉次の、「失わなかつたぞ、失わなかつたぞ！」という叫びで始まる有名な場面があるが、この場面を転向の描写とみなすか否かについては、研究者によって解釈が分かれている。笠森勇（二〇〇五年）によると、現在ではこの場面を非転向と見なす見解が主流になっているとのことだ。^{★4}

笠森論文は、この場面の勉次の述懐（「命のまたけむ人は——うづにさせその子」——おれもヘラスの鷲として死ねる——彼はうれし涙が出てきた。）に着目し、ギリシヤ神話のピロメラすなわちヘラスと日本武尊の「思国歌」を結びつけた点にロマンチスト中野独自の創意工夫が認められると評価し、中野と日本浪漫派の巨匠・保田與重郎との接点を考察している。官憲に弾圧された勉次が自らをなぞらえたというピロメラとは、ギリシヤ神話の登場人物である。義兄テレウスに陵辱を受けたピロメラはテレウスの子を殺し彼の食卓に上す。そしてテレウスに追われる身となったピロメラは夜鷲に姿を変え難を逃れたが、テレウスはピロメラの舌を切ってしまったという伝説がある。転向・出獄した勉次は、妻と妹の前で頭を下げる。しかし、「舌を切られた鷲」としての勉次は「何を、なぜ謝るのかはいえなかつた」。

吉本が重要視するのは、この場面以上に、勉次が父親・孫蔵と対面する場面である。孫蔵は、郷里に帰り翻訳の仕事しながら生活の資を稼いでいる勉次に対して彼の転向を責め、筆を折るよう言いつける。すなわち、自分はお前が捕まつたと聞いた時にはもう生きて会うことはないと思っていた。そのため転向したと聞いた時にはひどく驚いた。転向したのであれば今まで書いてきた事はみな無意味になつてしまうのであり、過去の作品が良いものであればあるほど転向したことによってだめになつてしまう。出獄後に書いたものは、転向の言い訳にすぎないのだから、今まで書いたものを活かしていきたいのなら筆を折るべきだ、という叱責である。しかし勉次は、一見筋が通つているように聞こえるこの孫蔵の言葉の中に「或る畏」を感じ、「よくわかりませんが、やはり書いて行きたいと思ひます。」と答える。吉本が中野の「村の家」を転向小説の白眉として評価する理由は、「村の家」の勉次は、屈服することによって対決すべきその真の敵を、たしかに、眼のまゝに視ているのである。いいかえれば、日本封建制の優性にたいする屈服を対決すべきその実体をつかみとる契機に転化している」ことによる。

そして転向作家は社会に適応した方法で売文渡世して終わつたと後世の歴史家に書かれるだろうと、孫蔵と全く同じ論理で転向作家を批判する板垣直子に対し、勉次と同じ態度をもって「もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個々の要因の錯綜を文学的综合の中へ肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加はれたならば、僕らは、その

時も過去は過去としてあるのではあるが、その消えぬ痕を頬に浮べたまゝ人間および作家としての第一義の道を進めるのである。」と答えた中野に、吉本は惜しみなない贅辞を送るのである。

佐野・鍋山の転向も、中野の転向も、右に述べた日本独特の歴史的背景によるものだが、ここにおいて、両者の間にあるわずかな「人間としての水準」の差異が社会的意味をもって現れ、前者は「日本封建制の優性因子にたいする無条件の屈服」として、後者は転向そのものを、敵を見据える契機に転化したものとして評価できる。

「転向論」の全体を眺めた上で注意しておきたいのは、吉本は「大衆からの孤立（感）」というありきたりな理由が、すべての転向現象の根本的原因であると認識しているわけではないということである。吉本が「大衆からの孤立（感）」という言葉で説明しようとしているのは、いくつかの類型がある転向現象のうち佐野・鍋山の転向における「外的条件」についてであり、「権力の強制、圧迫」が第一の理由ではなかった、ということである。転向の根本的条件は先にも述べたとおり、むしろ日本における「封建制の異常に強大な諸要素」と「独占資本主義のいちじるしく進んだ発展」との結合の特殊性をインテリが捉え損なったという事態である。佐野・鍋山の転向はそこから生まれた一つの現象である。また吉本は外的条件よりもむしろ「内発的な意志」を重視している点にも注意が必要である。

第二章 「転向論」の方法的特徴

ここで、吉本の転向研究の特徴を明確にするために、鶴見俊輔・藤田省三ら、思想の科学研究会による共同研究グループがとった方法と比較しておこう。

まず研究対象について比較しよう。吉本が転向現象をあくまでインテリゲンチヤの問題としたことは、鶴見らの研究グループが、大衆運動家・タカクラ・テルや翼賛運動の設計者・近衛文磨まで、共産党員以外の人々をも転向研究の対象としていることと好対照を成すといえる。

さらに、共同研究グループが、「転向」という現象を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」としたのに対し、吉本はあくまで内発的な意志を重視した点も特徴的である。^{★5}

共同研究グループの代表的研究者・鶴見俊輔からは吉本の議論においては転向の用語規定がそのまま日本思想批判の結論となつているとして、次のような批判がなされている。^{★6} 鶴見は、吉本の「転向」概念の定義について、「転向思想とは、日本の現実社会の問題をしっかりとつけとめることのできない思想一般をさすこととなり、日本の現実社会において有効なる保守をなしうる思想と有効なる変革をなしうる思想の双方をのぞく一切の思想である。ここでは、転向する思想とは、吉本の目的から見ても「駄目な思想」ということとはほとんど同義語となり、転向の研究が吉本においてはその転向責任の追

求をコロラリーとして含むことを示している」と、解釈と批判を加えている。

鶴見の吉本解釈に関して検討しておきたいのは次の二点である。

一つは、「転向思想」とはすなわち「駄目な思想」であると吉本が考えていたか、ということである。吉本の用語規定が、幾多の現象から帰納されたものというよりは、吉本によってアプリアオリに定められた規定であることは鶴見の指摘するとおりであろう。しかし鶴見は、同じ日本の典型的な二つの転向パターンと、例外としての中野の転向パターンとを、吉本が区別したことの意味を見落としてはいないか。佐野、小林、中野の転向はひとしく、近代日本の特殊な状況から生じたものではある。しかし佐野が日本封建制からめとられ、小林が現実的動向を度外視したのとは違い、中野は転向を、日本社会の構造をとらえるための契機に転化した。中野ないし「村の家」の主人公・勉次が、日本社会の構造を敵として見据えるためには、転向は不可欠の条件であった。(信奉の対象がフアシズムであれマルクス主義であれ)「思想的節操」如何の範囲にとどまっている限りみえてこない問題領域を、中野こそが初めて切り開いたということ、吉本は評価しているのではないか。吉本の議論のうち、佐野・小林に対してならば、「駄目な思想」と評価を下すこともできよう。しかし、中野に対する吉本の議論の中に、「転向すること」「駄目な思想」を対応させて考えるような一般的な思考は持ち込む余地は残されていないと思われる。^{★7}転向それ自体を悪とみなさない、という前提を共有していることは共同研究グループの仕事の大きな

特色であったが、吉本への解釈と批判において鶴見は自らの独自性を強調しようとするあまり、「転向思想」を「駄目な思想」と見なす、一般的水準に回帰しているように思われる。

二つめは、転向を論じる吉本が、「駄目な思想」とそうでない思想を判別できるような、超越のない抽象的な地位に自身をおいていたのか、ということである。つまり、吉本がどのような立場から転向現象を扱っているのが問題となる。

転向を論じる吉本の立場性が、検討されるべき問題となる理由は次のような事情による。転向論で取り上げられたインテリゲンチヤたちと、それを批判する吉本を、同じ「大衆の自己疎外態」として一括して扱っているかぎり、吉本は、自らが否定したはずの大衆を追い求める自己矛盾を抱えた一知識人にすぎない。しかしその理解は正確だろうか。吉本は、インテリゲンチヤはもつと大衆に近くあるべきだった、もしくはより厳格に公式に従うべきであった、という形での批判を近代日本のインテリゲンチヤにたいして行っているわけでないことは明白である。また、質の異なる二つの型に対する吉本の批判を、吉本の「二枚舌」として理解することも正確ではない。一見すると日本封建制に絡めとられた佐野を批判するには小林のように教条主義的でなければならぬように思われるし、現実的動向を度外視する小林を批判するには佐野のような形での転向が致し方ないことのように思われる。そしてその両方を実現することは一見成り立ちがたいように見える。そこでこの矛盾を解決するためには次のように仮説を立てたい。すなわち、吉本が佐野や小林と異なる

る意味で大衆の自己疎外態であったからこそ、両者に対する批判が同時に成り立ちうるのではないか。つぎに見るように、吉本の「転向論」から、時代の刻印ないし「死にぞこないの世代」としての自己意識、またそれゆえの大衆に対する独自の向き合い方を抜き去って、吉本を抽象的な立場におくことは出来ないように思われる。

第三章 断絶の意識と「死にぞこないの世代」としての自己規定

しての自己規定

敗戦の日、わたしは動員で、富山県魚津市の日本カーバイドの工場にいた。その工場には、当時の福井高等工業学校の集団動員の学生と、当時の魚津中学校の生徒たちがいた。わたしは天皇の放送を工場の広場できいて、すぐに呆然として寮へかえった。何かしらぬが独りで泣いていると、寮のおばさんが、「どうしたのかえ、喧嘩でもしたんか」ときいた。真昼間だというのに、小母さんは、「ねててなだめなさえ」というと蒲団をしき出した。わたしは、漁港の突堤へでると、何もかもわからないといった具合に、いつものように裸になると海へとびこんで沖の方へ泳いでいった。水におおむけになると、空がいつもとおなじように晴れているのが不思議であった。そして、ときどき現実にかえると、「あつ」とか「うつ」とかいう無声の声といっしょに、耻羞のようなものが走って仕方がなかった。^{★8}

これは吉本隆明による、太平洋戦争終戦時の回想である。吉本は、一九四二年、一七歳で米沢高等工業学校に入学すると宮沢賢治に傾倒するようになった。「ポエムをかくがゆえに、わずかにポエトたるの詩人にあらず、化学を専攻するがゆえに、わずかに化学者たるにあらず、農業問題をテーマとする政治運動家なるがゆえに、わずかに実践運動家たるにあらず、といったような宮沢賢治の総合的な性格」に憧れ、それを自身にも課していたというが、その志は「戦中・戦後の大断層」によって断たれることとなる。^{★9} もちろん敗戦が日本史に切れ目を入れた、などというのはこれ以上ない陳腐化した表現であろう。誰もが一九四五年八月一日を以て近代史の幕引き、もしくは現代史の幕開けとみなしている。そのことは、吉本についても例外ではなく、「転向論」もまた、吉本の敗戦体験の産物に外ならない。同論者は「日本の社会構造の総体にたいするわたし自身のヴィジョンを、はつきりさせたいという欲求に根ざし」たものであるが、このヴィジョンなしには文学的な指南力がたたないのだ、このヴィジョンの追求はすべての創造的な欲求に優先するのだという「氣狂いじみた執念」に吉本が至ったのは、なによりも敗戦体験によってであった。^{★10}

吉本は戦後一、二年の間、天皇ないし天皇制にまつわる物や言葉を見聞きすると腹痛、寒気を覚えるというような、「奇妙なノイローゼ」を患ったという。^{★11} その理由は吉本が回想しているように、「死にゆく自分を納得させようとするとき、どうしても残る空白を、「生

き神様」としての天皇で埋めようとしたこととも深く関わっている
と思われる。^{★12}

ぼくにも多少似た経験がありますからよくわかりますが、いったん死を覚悟したあと、戦争が終わったからといって今度は生き直さなきゃいけない。そのときの気持の切り替えがいちばんキツいわけです。特攻隊員としていったん死ぬ覚悟をしたあと、その気持を生き直すほうに向けることはなかなかできないのです。^{★13}

吉本は、積極療法が一番だ、という医者のおすすめもあり、それを徹頭徹尾、論理的に追求することに決めた。

太平洋戦争は、不毛の世代とよばれるわたしたちを生産した。この世代にとっては、死をおそれざる自己の否定という課題が、戦後の思想的な課題となりえた。イデオロギイとしていえば、戦争という非日常的な世界につかれた観念から、日常世界への通路をつける思想的な課題であった。すくなくとも、平和とはそのように理解されたのである。このような世代にとって、革命という課題が、思想上の日程にのぼるとすれば、けっして革命を戦争体験とそのまま同型にかさね合わせることはありえないのである。^{★14}

吉本ら「不毛の世代」にとつて、戦時中、死は自明のものとされていた。こうした「非日常的な世界」から一転して日常の世界に放り込まれた時、かつての死の自明性を否定することが第一の課題となった。そうした体験を持つ世代にとつて、来たるべき革命とは、「非日常的な世界」のものであつてはならない。こうした観点から、花田清輝や「近代文学」同人、旧作家同盟系の文学者たちのような「文学評価と歴史評価とを分裂させ、あるいは切離す方法」を拒否する。吉本が追求したのはどこまでも具体的・実体的な大衆にはかならない。ここに、敗戦という「断層」によって時代に取り残されてきた世代が、葛藤を経て、「生き直し」を計る様相が見て取れる。

ここで吉本は、自分は「自明の死」を死んでいたかもしれないという意識を捨ててはいないことに注意しておきたい。吉本は『きけわたつみの声』に対する短い書評で次のように述べる。同書は「戦争謳歌」に近いような短文を採録しない編集方針が取られたが、吉本は戦没学生という「生活責任を疎外された大衆」の出身階層とその思想はわかちがたく結びついているため、近視眼的視野にとらわれず全階層の戦没学生の手記を集めていたら、全戦没大衆の手記を象徴してははずだと批判を加える。

いよいよもなく事実であることは、戦没学生たち（の世代）が、自明の死に直面したときに、その現実体験のすさまじさに対決しうるだけの思想的指標を、出陣らの世代の何人からも見出すことができず、自ら考えて死と対決せざるをえなかつ

たということだ。

たとえば、戦没学生の死を無駄にしないために、平和を守らねばならないという意志は、『きけわたつみの声』の編集意図のなかにくみとられているかもしれないが、かれらが孤独のうちに追いつめた思想の重量はうまく編者によってうけとめられてはいない。わたしが、山下肇の『駒場』からも、『日本の息子たち』や『同じ喜びと悲しみの中で』からも納得しえなかったのは、その思想の重量であった。すなわち、わたしのような死にそこないの世代が、いまもって冥黙するわけにゆかない所以である。^{★15}

吉本を支えているのは、死を受け容れるために孤独な格闘をしていた「死にそこないの世代」としての自己規定である。幾人かが死に幾人かが生き残った中で、死んでいった同世代の思想的格闘がすくい上げられず時代の断層によって切り離され戦前においてきたままにされていることが、吉本を黙らせてはいなかった。^{★16}

吉本は、「死にそこないの世代」という自己規定にそいながら、彼の思想を作り上げていく。このことは、「死んだまま生き」、「生きながら死ん」でいる自らの運命と闘う過程にはかならない。「ようするに十六歳から二十歳ころまでのわたしは、何ものでもない庶民の卵にすぎなかったかもしれないが、しかし、この何ものでもない存在が、敗戦にぶつかり啓示したものを、掘下げ、拡大し、ねり直し、うちのめすよりほかに、生きながらの死を、すこしずつ

解き放していくみちはなかったのである」。^{★17}

第四章 「生き直し」のための思想構築

一九五六年の経済白書が「もはや戦後ではない」という言葉で締めくくられたように、日本経済は戦後復興期を経て高度経済成長期に突入していた。また同年には日ソ共同宣言の成立と日本の国連加盟が実現し、本格的に国際社会へ復帰する。「転向論」や、久野収・藤田省三・鶴見俊輔らによる『戦後日本の思想』が出された一九五八年から翌五九年にかけては当時の皇太子明仁の婚姻で世間がいわゆる「ミツチブーム」に沸いた時期でもあった。戦後社会には、大衆文化が開き、以前と全く異なる様相を見せていた。

そうした社会情勢の中、政治と文学を巡る同時代的情況に関して、吉本には一つの危惧があった。それは、「文芸復興期の文学の状態と現在のそれと、かなり類似的に考えられる時代がいま来ている」のではないか、という危惧であった。吉本によると、文芸復興期とは、一九三三、三四年のプロレタリア文学運動の崩壊後から、一九三七年の満州事変までの期間であり、そこでは、作家達は「政治との関わりを問題にしないで文学を生みうるのではないか」という考え方がまかりとおっていた。^{★18} 具体的にいえば、侵略戦争にかり出された庶民は、「生ける銃架」であり、中国やソグイェトロシアに戦争をしかけるために弾丸を運ぶ庶民労働者は「めくら馬」であるというような考え方であるが、そのような考え方をしている限り、「前衛」

がいかなる理論を展開しても机上の空論にすぎない。^{★19}

吉本は、プロレタリア文学運動・政治運動の敗退は、「それ自体に内在した、理論的な、組織的な欠陥と誤謬によって、大衆から孤立したことに最大の原因があった」としている。すなわち日本社会の二重構造を捉えそこなったという理論的欠陥の結果として、大衆から見限られたインテリゲンチヤは、中野のような特殊な事例を除けば、大衆に対して無条件に屈服するか、大衆と訣別して論理上の自己完結のみを目指すかのどちらかを選ばざるをえなかった。

自由主義者と対立しようが、チーム・ワークを組もうが、大衆意識や大衆組織との対応性の問題が、芸術理論や組織論として、正当に解明されなにかぎりは、いつの時代でも反体制的な運動の没落は必至であるというほかはないのだ。^{★20}

日本型モデルニズムはもちろん、無条件の屈服も、大衆と具体的に交錯したことはない。だからこそ吉本が目指したのは、平時にある大衆と、いかに具体的な接点をもつかということにはかならなかった。だからこそ文学と現実の政治、ないし文学と現実の歴史を切り離し、日常から乖離した抽象的な、理論の世界に甘んじることが、吉本にとって許されざることであった。そうした彼の認識は、「死にそこないの世代」としての自己規定と地続きのものであったといえる。

現実的な大衆の動向と、理想的思想（マルクス主義でも、天皇で

もよい）とを両極にもつ数直線——「村の家」と、コミンテルンと

を両極にもつ数直線と言い換えてもよい——を指定し、その線分上の任意の一点に知識人を置くという考え方をとることは容易である。この時、佐野・鍋山は、数直線の上でまず理想的思想に近づこうとし、結局大衆の側に絡め取られたとみてよいだろう。^{★21}しかし

ここで注意すべきは次の点である。佐野の転向について吉本が批判したのは、佐野は日本の封建制的な重い枷を解いて純粹に「マルクス主義」を徹底するべきだった、などということではない。なぜならその批判の仕方は、「日本型モデルニズム」による転向批判の仕方にほかならないからである。また同時に、吉本が「日本型モデルニズム」を批判する時に、より佐野のように大衆に迎合するべきだった、などと主張したわけでもない。よりどちらかの極に近くあるべきだった、などについても始まらない。より大衆に近づいたのが佐野で、より理想的思想に近づいたのが小林だったのだから。

つまりその数直線の上に自身の立ち位置を定めた時点で、日本のインテリはどちらかのベクトルにしか舵を切りえないのである。その両極——吉本の言葉で言えば、日本の「封建制の異常に強大な諸要素」と「独占資本主義のいちじるしく進んだ発展」——を見据えなにかぎり、どちらへ転んでも吉本によって「転向」と批判されることが運命づけられているのだ。「知識人の批判こそが知識人の特徴なのだ」（前述、柄谷）という言い方が、佐野および日本型モデルニズム両者に対する吉本の批判にあてはまるとすれば、佐野や小林と吉本とは、まったく異なる立ち位置にいると考えなければなら

ない。吉本が、知識人批判を展開する時、大衆か公式のどちらかにより近づけ、などと言っているときなすことは誤りで、右の意味での数直線から離脱せよ、と主張しているのだと理解すべきではないだろうか。両極——そして日本における両極の結合の構造が見渡せないのであれば、佐野・鍋山と日本型モデルニスムスの両方を批判することはできないだろう。吉本が目指す「日本の近代社会の構造」の把握とは、この両極の結合の構造を捉えることにはかならない。

とはいえ、知識人は数直線の上を自由に動いてゆける、あるいは数直線から外れていけるように自由な存在だ、という言い方は必ずしもあてはまらないように思われる。吉本をして数直線から離脱せしめたのは、敗戦が作りだした「断層」であつた。鶴見（前掲一九六二年）は吉本を、ディケンズの小説『大いなる遺産』の登場人物・ミス・ハヴィンガムになぞらえたが、これはきわめて秀逸な比喩と思われる。結婚式の当日婚約者に裏切られ発狂したミス・ハヴィンガムは、それ以来花嫁衣装を着て暮らし続けている。彼女の屋敷の時計は、破談の手紙を受けとつた九時二〇分前で止められている。鶴見のたとえを借りるならば吉本は、いわば一九四五年八月一五日で止まった時計のある屋敷に住む偏執狂といつたところだろうか。この屋敷に閉じこもることは、吉本を「日本人の多くのもつ易变的、他者志向的性格」から解放した。自然の時間の流れと同じように変容してゆく大衆と、時間が止まったままの固執の屋敷のコントラストは極めて鮮やかに思われる。しかし吉本はたんに内閉的になるばかりではなく、戦前のインテリゲンチヤが捉えきれなかつ

た「屋敷の外」に、鋭い視線を向けていたことも忘れてはならない。

吉本が「詩作行為とは自然現象のやうに明滅する僕らの精神の状態を持続し恒久化しようとする希求に外ならない」と述べて、詩と批評の両側面をもつた新しい方法を編み出していったこと、そして『固有時との対話』および『転位のための十篇』を通じて「孤独」との対峙の仕方を決定していったことは、高橋優香（二〇一九年）の研究によって明らかにされている。^{★23}自然現象のやうに明滅する精神を恒久化しようとする吉本は、たえず変貌する大衆的動向に対しても、それを批評ないし詩の言葉によって捉えようとしたのではないだろうか。

仲本昌樹は、吉本を「日本のマルクス主義陣営の内部で標準的な唯物史観を内側から変容させ、現代思想につなげるような議論をした人」と説明しているが、奇妙なことに、吉本の先進性の背景にあるのは「死にそこないの世代」としての自己規定だという逆説が潜んでいるように思われる。

おわりに

ハイアラーキーに定住し蓄積をモットーとするようなバラノ型社会から逃走して、軽やかに知と戯れるスキゾ型の知識人の姿（浅田彰、一九八四年）を吉本に見て取ることは難しい。^{★25}吉本に「大衆からの自己疎外態」としての姿を見て取るならば、むしろ思想的に柔軟な大衆とは対照的に、敗戦が作りだした時代の断層に固執する、

偏執狂的な知識人という言い方ならば成り立ちうるように思われる。もちろん、浅田と吉本のいずれかが優れていていずれかが劣っている、ということ論じたいわけではない。繰り返し強調しておきたいのは次の点である。知識人と大衆との関係は、自由と不自由、ノマドと定住民、啓蒙主体とその対象、そういった関係性だけではない。時代の断層に固執する知識人と、時代の断層を軽々と越えてゆく大衆という関係性もありうるのではないだろうか。吉本が大衆から遊離しているとすれば、こうした意味においてであると思われる。

しかし、「死にそこないの世代」と自己規定する吉本が、学生運動の指導的理論者となり、また八〇年代ポスト構造主義ブームの大地になったとはどういうことか、この点についてここで触れる余裕はないが、柄谷が言うように大衆から遊離した、大衆のたんなるアンチテーゼとしての知識人に、大衆を牽引することができるのかは問われなければならない。時代の断層に固執しながらも動態的な大衆を追い続けたからこそ吉本は、大衆的動向と無関係に論理を空転させる「日本型モデルニスムス」を批判する資格を得たのではなかったか。

本論ではあくまで敗戦体験と転向研究に焦点を当てて論を進めたが、のちに書かれることになる彼の広範な著作にこの断層の意識がどこまで貫かれているのか、また深化したり、放棄されたりしているのかについての検討は、稿を改めねばならない。^{★26}

- ★1 柄谷行人「死語をめぐって」『終焉をめぐって』講談社学術文庫、一九九五年（原著一九九〇年）。
- ★2 吉本隆明「転向論」『吉本隆明全集五』晶文社、二〇一四年。以下、同書を『全集五』と表記する。「転向論」については『全集五』六五〇頁の間宮幹彦による解題も参照のこと。
- ★3 吉本隆明「芸術的抵抗と挫折」『全集五』、二九七頁（原著一九五八年）。傍点は原文の通り付した。
- ★4 笠森勇「ヘラスの鷲——中野重治における「転向」」『金沢学院大学紀要（三）』二〇〇五年。中野重治「村の家」『全集現代文学の発見 第三巻 革命と転向』学芸書林、一九六八年（原著一九三五年）。
- ★5 思想の科学研究会編『共同研究「転向」上』平凡社、一九五九年。鶴見らは「権力」とは自己以外の人を支配する力、とくに国家権力であり、「強制」とは権力が屈服を要求して、各種の具体的、特殊的手段に訴えることと定義づけしている。その上で、完全に自発的な思想変化と、完全に強制的な思想変化のグラデーションの中の任意の一点に現実の思想を位置づけることができるとして、転向の方法、回数や速度、年齢、家族、職業、思想歴、自覚の度合いなど、多様な区分を設けることでそれぞれの転向現象を具体化しようと試みている。
- ★6 鶴見後輔「転向論の展望——吉本隆明・花田清輝」（『共同研究「転向」下』平凡社、一九六二年）。
- ★7 「転向自体が悪であるとか、非転向が善であるとかいう問題提起の仕方は全然成り立たないわけです」（吉本隆明「中野重治」『歌のわかれ』『全集五』四〇五頁、原著一九五八年）。また、思考変換を起こしていなくても「駄目な思想」は「駄目な思想」であらう。なおくどいようだが、「日本型モデルニズム」型の「転回」ないし「非転向の転向」も、「転向」の一種として扱われていることには改めて注意を促しておきたい。
- ★8 吉本隆明「戦争と世代」『吉本隆明全集六』晶文社、二〇一四年、六四頁（原著一九五九年）。
- ★9 吉本隆明「草野心平編『宮沢賢治研究』」『全集五』六〇七頁（原著一九五八年）。
- ★10 前掲注2、吉本隆明「転向論」『全集五』三六八頁。
- ★11 吉本隆明「天皇制をどうみるか」『全集五』五〇一頁（原著一九五九年）。
- ★12 吉本隆明『日本語のゆくえ』光文社、二〇〇八年、一四三頁。
- ★13 同前、一〇〇頁。
- ★14 吉本隆明「アクシスの問題」『全集五』四三五頁（原著一九五九年）。
- ★15 吉本隆明「戦後学生像の根——戦中、戦後の手記を読んで——」『全集五』六〇九頁（原著一九五九年）。
- ★16 吉本は、「橋川文三への返信」（『全集五』五〇五頁、原著一九五九年）において次のように語っている。「あなたが提起された興味ある指摘——即ち、敗戦による日本人の発想法の断絶は世界的にも稀有ではないかということ、また、明治とは明治十年代までを指すということ——は、はなはだ暗示的で、これを延長すれば、昭和というのは十年代までで、それ以後は昭和でない何ものかへの過程であるのかもしれない。そして、われわれの世代は、まさに昭和の最後を大戦争の体験によって実感した光栄（？）ある世代であるのかもしれない。プロレタリア文学運動が崩壊し始めた「文芸復興期」にあたるのが、吉本が十歳前後であった頃であり、その約十年後に敗戦を迎えるまで、学生時代をほとんどそ

の時代に過ごしたことになる。一九二二年生まれで吉本の二歳年上にあたる橋川文三も同様である。なお、この論考は橋川文三の「近衛も東条も知らぬ若い人／吉本隆明に／僕は既に旧弊な人間になったのか」に対する返書である。

★17 前掲注8、「戦争と世代」『全集五』六四頁。

★18 前掲注7、吉本隆明「中野重治『歌のわかれ』」『全集五』三九〇頁（原著一九五八年）。

★19 前掲注3、「芸術的抵抗と挫折」『全集五』二八二頁。

★20 前掲注17、「アクシスの問題」『全集五』四三二頁。

★21 柄谷行人「日本精神分析」『日本精神分析』講談社学術文庫、二〇〇七年（原著一九九七年）。柄谷は、「無限抱擁性」と思想雑居性外来思想の何もかもを受け容れつつ同時に排除する日本文化のメカニズムを、漢字と仮名の併用という観点から解明する。吉本の言い方を借りれば、佐野や鍋山の転向は、日本の小情況に足をすくわれた、柄谷の言い方を借りれば、マルクス主義は日本においてファシズムへと「造り変えられた」と表現することができよう。

★22 吉本隆明「詩と科学との問題」『吉本隆明全著作集五 文学論II』勁草書房、一九七〇年。

★23 高橋優香「『固有時との対話』・『転位のための十篇』と転向批判との関係」『国際文化研究』二五、二〇一九年。高橋は、吉本が詩という形式をもちいた批評の方法を確立する経緯を追った上で、『固有時との対話』（一九五二年）と『転位のための十篇』（一九五三年）における「眠り」、「睡り」という言葉の意味の変化から、吉本が戦後社会からの孤立を受け容れ、徹底抗戦の態度へと移行していく過程を辿っている。

★24 仲本昌樹『戦後思想』入門講義——丸山眞男と吉本隆明』作品社、二〇一七年、一八四頁。

★25 浅田彰『逃走論——スキゾ・キツズの冒険』筑摩書房、一九八四年。

★26 吉本の六〇年代安保闘争体験に関する研究として、白井聡「吉本隆明と藤田省三——「大衆の原像」の起源と行方」(『ひとびとの精神史 第六巻 日本列島改造——一九七〇年代』岩波書店、二〇一六年)をあげておきたい。吉本は六〇年代安保闘争を、敗戦後の民主化プロセスの延長線上に位置づけられるものではなく、戦後の全社会に対するトータルな否定だと捉えた。さらに吉本は、私的利害の追求によって日本はブルジョワ民主段階に到達するという現状認識をもたない丸山眞男を、「擬制進歩主義」として批判した。藤田省三によると、明治レジームは、近代的国家権力として自立できなかったために封建的共同体の原理を統治原理の中に積極的にくみこまざるをえなかった。このことが、天皇制国家の支配原理の起源であり、本質であるとした。藤田のこの見解は、吉本の「近代日本の二重構造」という論点と通底している。

ひらの・あかり（歴史学者）

